

1 岐阜城——伝統のなかの革新性——

はじめに

岐阜城の所在する金華山（標高329㍎）は、濃尾平野と美濃山地の境目、長良川が形成した扇状地の扇頂部に聳え立ち、その雄姿は平野のどこからでも望みできる（写真1）。西山麓、岐阜公園周辺は歴代岐阜城主居館があつた場所で、発掘調査が進んでいる。館から西に広がる平地は惣構に囲まれた岐阜城下町で、道路や街区に往時の面影をとどめ、武家屋敷地区や七曲り通（本町筋）・百曲り通（大桑町筋）の二本の道路を中心とした町屋地区が推定されている。今から四百数十年前、中世から近世への過渡期において、岐阜城は斎藤道三・織田信長らの活躍する舞台となり、日本史上大きな役割を果たした。

本章では、信長を訪ねたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスの記録を織り交ぜながら、発掘成果に基づく織田信長居館、分布調査を踏まえた岐



写真1 金華山全景
（山頂が復興天守、矢印が織田信長居館の位置）

阜城の姿を紹介したい。

1 岐阜城の歴史

岐阜城（稲葉山城）は建仁年間（一二〇一―一二〇四）に鎌倉幕府執事の二階堂山城守行政によって金華山（稲葉山）に築かれたと伝えられているが、この時代の城の姿はわからない。本格的な城の建設は、戦国期（十六世紀前半）に斎藤道三が行ったとみてよいだろう。

永禄十年（一五六七）九月、尾張の戦国大名織田信長は稲葉山城を占領、城主斎藤龍興を追放し、小牧山から岐阜へ本拠を移した。信長は岐阜で天下布武の印判を使用しはじめ、足利義昭を奉じて入京、首都の治安回復に努めるとともに、天下統一の戦いを進める。永禄十二年（一五六九）五月、ルイス・フロイスはキリシタンの保護・布教の許可を求めて岐阜を訪問する。岐阜の町や館、城を記述したフロイスの報告は『日本史』や『書簡集』に収められ、貴重な同時代証言となっている。天正三年（一五七五）、信長は家督を嫡子信忠に譲り、翌年安土に居城を移す。

天正十年（一五八二）六月、本能寺の変で信長、信忠父子が自害した後、岐阜城主は三男の信孝、ついで池田元助、池田輝政、豊臣秀勝と変転する。慶長五年（一六〇〇）、信長の孫織田秀信が城主の時、関ヶ原合戦前哨戦で落城、その後再び使われることはなかった。江戸時代には幕府領を経て、尾張藩領の一般人立ち入り禁止の御山となる。御山は山廻り同心や御山看守白井氏らによって管理されていた。歴代尾張藩主の岐阜御成の際には、鵜飼見物とともに登山・鹿狩りが催された。

入山禁止が解けた明治以降、城域（金華山）は伊奈波神社、公園部分を除き、宮内庁御料局（のちの帝室林野管理局）の管轄となり、戦後は林野庁に受け継がれる。城がなくなった後も近世、近現代を通じて時の為政者たちが手厚い保護

をしてきた結果、都心に隣接しながらも自然豊かな金華山が形づくられた。

明治四十三年（一九一〇）には岐阜保勝会により全国に先駆けて山上に復興天守がつくられた。この天守は昭和十八年（一九四三）、失火により焼失する。一九五五年には山麓千畳敷下と山頂を結ぶロープウェイが完成、翌年には鉄筋コンクリート造の復興天守が再建され現在に至る。

金華山は全山チャートという硬い岩でできている。ほとんどの場所は人間の手が加えられない自然地形のままで、急な崖が至るところに見られる。石垣や人工的な平地は、山上部を中心とした尾根筋や登山道沿いを中心に点々と分布するだけである。城郭研究者の中井均はこうした城の姿を「天然の要害」と表現している。

2 発掘が解き明かす信長居館跡（岐阜城千畳敷遺跡）

金華山西山麓、ロープウェイ駅のある岐阜公園の山際には斜面を段々に造成した地形が残されている（第2図参照）。付近は「千畳敷」「千畳敷下」と呼称され、信長をはじめとする歴代岐阜城主の居館があつたと伝えられる。信長居館跡の発掘調査は過去三回行われ、二〇一一年段階で4次調査を終了し、二〇二一年には総合調査報告書を刊行している。ここでは二〇一一年時点までの発掘調査で何が見つかってきたか、その概略をみていこう。

巨石を並べた入口（写真2）

一九八八年、岐阜市制百年を記念してつくられた冠木門をくぐり、石段を上がると広場に出る。これは信長が築いた入口の施設で、1次調査で見つかった



写真2 巨石を並べた入口



写真3 最初の平地（発掘時）

遺構を整備したものである。道の両側の区画に人の背丈ほどの石を使い、折れ曲がつて上の段に続いていく。従来この遺構は、城郭の入口「虎口」と評価されてきたが、最近の発掘成果から見て、私はこの入口の施設は、庭を主体とした迎賓館的な空間への導入部と見るべきでないかと考えている。上を見上げるとロープウェイ越しに復興天守を望見できる。

フロイスの著書『日本史』（以下『日本史』の引用は《》で表記）では、山麓の館を《宮殿》と称し、《驚くべき大きな截断されない石の壁がそれを取り囲んで》いると続けている。彼のいう《石の壁》の一部は発掘で見つかった巨石と考えて間違いないだろう。

最初の平地（写真3）

折れ曲がる通路を上がると最初の平地に出る。発掘調査で一面に粘土を貼った土間や、数個の礎石が見つかった。平地は南側を中心に10㍻ほどの厚さの炭層で覆われ、宴会に使った素焼きのお皿（かわらけ）や焼けた壁土が大量に見つかった。おそらくこの付近に何らかの建物があり、落城時に焼け落ちたのだろう。

南側にはさらに上に登る入口部分が整備されている。向かって左の石垣は二段しか残っていないが、大形の石材を使用しており、本来はさらに高く積まれていたとみられる。表面が真っ赤に焼け、落城時の火災のすさまじさを伝えている。平地の東側には発掘で見つかった信長時代の水路が整備されているが、隣を現代の谷川が流れていて、谷川の位置が当時とほとんど変わっていないことがわかる。フロイスは《石の壁》に続いて、《第一の内庭》があり《劇場風の建物》が建っていると記す。発掘遺構との対応は難しいが、この付近にそんな施設があったのかも